



門九遠  
1451  
卷 2

長濟夜話州二

○蠻舶一艘入津討罰之事

黒船林止ありていまこ三年と経ざるふ寛永十七  
庚辰五月十日やあまういの思船一艘長崎乃津よ  
ありて高賣と称し堅死停止之事既よ先の年  
抄ふとつこさ終らぬらんド押入津致さる事  
其罪科甚深りと聞東よりの由下知しそ別人殺  
七十四人乃内六十一人殊得ありて船内湊内とく  
も浦とつこ所そ荷物共よ焼沈めらるる殘る  
十三人ハ日卒人本ら事同日云せざる故仍り歎れり

長崎夜話二

本行より聞えたるに由りこれを得て唐船の  
乗船一艘ありけるに於て本國へ入りて  
より公諸るに二度日本へ来る事ありし  
にそまひぬ

○變船二艘本朝之事

正保四年丁亥の六月廿四日と云や又亞媽港あまがり  
二艘二艘渡りぬに本朝へ一艘は長と十六丈  
あり一艘は十丈とありの大船とてそわりきり  
は船の常の高し船はわけて皆軍船の造りあり  
荷物はい兵糧と武具ありとの外にきりきり

後前肥前あま守と長崎刺使馬場氏清會談わ  
りてまづ船をい濠内へ入らせらるる通事とありて其  
意を固しめし終事ありと云ふに毒く固東へ  
抄をせしりいされ公乃有公竊ひ由下知の聞えん  
程船をは嚴密に護るべしとて九列に徳大名馳  
集り濠の浦く西東乃強漢に船屋にうらりて  
陣を造りおのく數百の軍船軸とありて今  
うくや實をよれ由下知をそし居りし船板都合六  
百餘艘士卒四萬九千餘人濠の内へ居ありて  
津口の外浦とありしゆりて徳大名陣ありしり

まへに外陸に軍士報役のともあがりしに到るを  
鑑く五萬人の銘をり長崎所これ騒動大船  
ちりびされど商人の多し徳付るも多しに  
されば蠻人の妖術と事とありいなり種ごり  
つらつとちり走り出さんしけりつとと徳之將  
詮儀ありて別津口の赤木村より西の方男神乃  
岩鼻すて四町より海とよ船後をさるべし  
乃大綱をへり上り赤木の板を敷き入るれば  
岩波と海の面も忽ち小陸地ありて人馬往  
來せしありと云ふ船よりいりちりちりいりて

まへに身の病も波れありと云えり中と申し  
免しききききと云ふ友船と云ふいみ  
りひおありし晝に囉叭を吹ありて用をい  
ちり有と云ふかちりふやふ七月も嘗て  
い徳水の士平一しとて打集りて関東に  
通して肉もぞやえさんしと討ちりちと  
定りゆりふりねれと云ふと云ふ  
石火矢ありしつら幸されば相が力あり受と  
ちりちりやく苦海を渡りてんあときと云ふ世の  
情もふとておのく酒料ちりちりちりちり

文志とてめうとみおろりなとすもわうてきとて  
 おろろ八月朔園東の苑脚到来とてけし思船  
 の西媽港乃使船あてきとての罪と謝し前例  
 のおろく日本後海免許あん事公彩い認る  
 使されぬ櫻の謀しとて後海のりけあるとて  
 ち移てある事あうれり強くある事あうの再犯  
 通つとて強くと堅く命とて終て八月六日長崎の津  
 を出帆とてけし思ありし謀罪の思船の時商人れと  
 もあうてあうの國さぐあうよのあうとていひと  
 うやされいあうれ災い貪欲より起れりあうとて

ぬみらに益蓋の物とてと積りてしとて  
 事唯け國たうる金銀と求むりよりうはと  
 しとて公おを事あうりたりのいりてあ  
 どもや得るうたれ乃寶と貴びざれとのいあ  
 ぬとておかりとてたれととせむびらとてあ  
 ○西媽港より日本人とて来船とて事  
 右とて三十八日とて終く貞享二年し丑六月二日  
 あまりの船一艘入津とすのや事あまのりて法  
 人せらんとてあやとめら處よ日本入れとて伊勢  
 國渡會那社領村の者十二人とて大文字にせり

籠居をみても人といふは怪しき人長らる  
別刺史河口氏の令に依りて通事番士の  
小船を押しせりある舟とて同船りし  
船主十二人れ日本舟人を連出せり子細  
則十二人一同よりをりはこれに伊勢  
津の者をして廻船一艘よまらみ去年  
江戸へ高賣し約りて帰帆乃何事  
りきゆきもこれに漂ひ流され船  
漂りて一ツの島に流しつゝ  
みり其人は中れ日本の詞  
をりて

日本にあらはれりてと移人  
乃後船よのきりては  
は國東へ作せられ船とい  
人乃老成に受りて獄  
飛脚に來りて日本漂  
船されい後來の羅  
向後漂流乃者ありと  
事たりと執りて伊  
り貪欲の執心残り  
よりの智謀やと

十一人共よ故郷より人されたりぬ

○エゲレス船日本に來ル始之事

諸厄利亞國の紅毛玉の邊より海よりて豊饒の  
水土抄をて日本を程乃國なるより比叻の船商賣  
やして天正八年庚辰の夏初より平戸にあり  
て商賣し是より毎年後海より年二十の計  
慶長五六年亦ありて高物利徳とて先々  
當年より程乃國より相談し其旨  
よゆをきて又く本朝とて平戸乃領主へ  
詔へたりふとの意よ任まじとてありとされたり

又年よりある人の多ありしが御朱を以て給  
せ給ひしに別國東へは青砂を以て給ひしに  
らまの御朱を以て由朱を以て給ひしに  
是頃悩んで是とたつりぬされと國を以て  
中といふ人のつらひ後海より年々しりして  
は國乃人の紅毛玉の義強くを極と風俗を  
合與ふころとこれよりやおのこより新がら  
後海を止ちし世のつらひと終るなり  
もくと是をより終り終るもはるなり  
然れた世よりけり何ありぬまじ又つら

幸しよわさるものやと申ひく人延寶元癸丑は  
五月をげきと船一艘長崎の津へありて右乃  
こゝろ高賣ゆりされん事をと彩ひ茶の由朱布と  
物本わりの剛刺史岡野氏江府へ達とて往ぬ津  
先ちて七月帰帆と直乃由朱布をい團王  
乃藏おかさめをくればう往を毫髪もぬぐを  
透すけしてお後まてこゝろや船も人も紅毛蠻  
人多ふりりかいつは種類了迎くれは紅毛  
船乃う人よ又は船をはゆゆりされをたをまて  
りこゝろや是れ船又日本に執公船りあるにや

やおしとらちをゆりぬ

○唐船始入津之事

唐船は日本に本なるいつありし事なれど  
大元乃世より絶くさししが大明の世日本乱世  
かりしに九列の事されて西に押領の士多く  
公をのいすしめぬし用らぬと海を浦くゆく  
のともあり南東浙江乃海を普陀舟との語  
く福州の西に押領の西の村里縣府に到て  
民屋富家を乱暴し財寶を奪取或は婦女  
を害し放逐り悪の事をさる是と倭寇又い



倭賊とついで甚くゆきしに忽ち舟は是をれ船みるハ  
 幡乃二字公書て船志す此旗み立る方ゆは船と  
 ぐりん船といふハ幡乃唐韻なり也了けたくも  
 我朝軍神の号を賊船乃名み穢しなる事  
 口惜とるふあどやうは有らばされい唐土を  
 日本船と制禁をす事甚相しく又唐土の  
 船日本入後海のより甚制禁ありしゆ人太田  
 氏乃聯合船乃外ハ日本より船多く唐土よ  
 り来る船もたるとし志るゆり今時日本乃  
 静濠りくねす唐土とせぬとめさば海く唐

土船も牧をゆり長濠の津は唐船ありし初めの  
 永祿五壬戌の年津乃内戸所といふ浦は到るぬ  
 うのころすてい唐土と明朝の代といふも日本後  
 海をはゆるとせらばしむ海を村里に商人志のい  
 く小船はとて大船平戸とすまの浦くよ来  
 たり船もわるとし荷物ハ磁器布本綿菜葉  
 砂糖のちとらぬおとく世の人質素なれ織物  
 綾綿れ類と持来る事ありしは存る船あり  
 しより里民懇華にさしよりは珍貨と好り  
 ぶせくぬくころて唐人とさぬくの珍貨は葉

乃織物多く持後も世にまじり也けしき昔今と  
 中より衣服飲食家屋器財醫藥やく病療びやうりやう古今の  
 二はいしめかひつらん今に志ざらん人の有らんは  
 かねものいさゝかゆらん事ありあるとあはれん又  
 有ふまうせて捨ざらん事足ざらんといふは  
 ろの姑りぬらむ事ありて今又いふらん人とも  
 と道いわどたの溜たまり金とらん物ゆゑもの多おほく焼やる  
 いかゝ焼やるものゝていた餼かやとく考かんれ小火こゝろに用もちら  
 るものいい薪たき少すくなりとらん餼かやとく金かね溜たまりるもの  
 儲たくわふもの志こころざらんてくれとらんや人の身みも

おのゝをちりつる今の世はあつたて豈いかむしに  
 久ひさか事こと得えん唯ただ世よ共とものうけりゆくありは  
 を見み開ひらく樂たのしみじこをわはれけし

○世よ界かの金かね銀ぎん之の沙す汰た付け紅べに毛げ金かね貯たくわへ到いた事こと

異國いこく船ふねの津つよ生なれて世よ界かの金かね銀ぎんの中なかに女めとあつら  
 の子こん女めたりらん人の風俗ふうぶく鳥獸ちゆうぶつ魚虫ぎゆうちゆう草木そうぼく本の  
 いふはあつたあつたゆゑとあつたい多おほくれど志こころじ  
 及およぶがくくわくやまふおれはあはれは希まれ也  
 唯ただ儲たくわへるものありて金銀かねぎん積たまり貯たくわへるに志こころじ  
 意いある事ことの四夷しゆい中華ちゆうかのうりなく見みるはあつた

身を失ふるやとあらは危うきことゆきぬるは  
 日本のもゝ金銀多きをわびせ果の中金銀多  
 きに困多きといふは日本の人れはくく土中  
 穿ら入事殺里あるをいけりごとくかたひ  
 くごとく或は其國主の制禁をてし以穿ら地と  
 掘り甚く掘りむはわりの金銀の困土乃  
 精粹あるふ多く掘りむし土の精神と柔弱  
 ありあはる道理を案くぬれむり或は困り  
 金銀貸貸多きといふは美民驕奢者ゆて却て  
 後は美民困窮よ及つるものなりとて困の質

財増殖を過るは制はの困とありといひ朝鮮  
 し賃索と本とて困法とまはしや柔翰先生  
 文集もと困り金銀多きわの民利欲謀計み  
 趨ふよりくくくり蠻人のまのくは又け意  
 めりわびず他乃困は金銀及く我國は集  
 め新んとゆふあらん實承のほや紅毛平戸へ  
 入付のわくもは日本へあるとして古風り  
 放され南部れ東海してつらの清狐も付て水なき  
 枝糸よりよりくくふ其形はあるは黄金金  
 々れは多くぬめぬつてねをせんととらるる

ろく物事モノをくさぬくらうに成はつて出せんと  
 せしと舟ふねにうみまうらう少く物事モノ日ひも既まも書  
 せんともれい思おもいつくはは物モノの神かみ乃すなは惜おぼしみ  
 たらんと思おもこゆのへいあうら物モノ成な成な成な海うみに控  
 くら何なにあうみ出でてお船ふねよりうめ相あえより平へ戸  
 へ到いたりて河か内うち浦うらとて又また西にしに荷に物モノをくおりけりぬ  
 其その船ふね屋や右みぎ乃すなは金沙しんさのこをれらるが中うちと水  
 白しろ丸まるひらひらとて酒さけより多おほ飲のみくらとてや其  
 黄金おうごん銀ぎん両りやうの者ものとも脇わき指さし乃すなは具ぐより用もちひて存ぞんり  
 其その物モノ信しん乃すなは世よ界かい乃すなは國くに也なり

日本にっぽんの東あづま海うみよ令しん崎さき福ふく崎さきありとてはは物モノあうん  
 けね又また尖とがとせちらとて久ひさん紅べに毛げ人ひと今いま一度いちどけ物モノを  
 君きみの物モノなるとて二三年にさんねんの糧かてと積つみおくら日本にっぽんの  
 東あづま海うみよ到いたりて四方しつぱう八方はつぱうを系けい白しろ乃すなは君きみのこゝが令しん崎さき  
 浦うらとてある事ことあうとてや物モノあうはは海うみ洋やうよは  
 高たか雷らい帝ていに浮うく或あるい屋や樓ろう乃すなは勢せいひちちる気き  
 海うみより立た事こと多おほとてあされい令しん崎さきくられては  
 さらしとせん浦うらとせし物モノあうとて都みやこては  
 海うみの世よ界かい第一だいいちの灘なみ海うみとて奇き怪かいの事こと多おほとて  
 あされい變かへ船ふねと物モノあうとてや相あらうの紅べに毛げ船ふね

水は訛り南部の地へ漂着し枝舟とありし五六  
 人水たふしせりる故南部の浦人怪しき三人を捕  
 へりしに餘り逃れて存船し出まぬ捕へり三人  
 の紅毛人の南部より江戸へ送りつるにさるけ三人  
 中平戸へ度々往く所が有て日本詞を平  
 戸の者よ志筑某といふものこそけし能く無  
 かりといひふ別平戸へ往るありて志筑  
 をめしきれい早らうとてありぬ紅毛人は是の事  
 悦ぶる事かさるるを別志筑番に知らせし  
 志筑通達分限して公事の由らうといひ解められ

汝長崎へはまき来るべしとて三人乃紅毛人引つて  
 長崎よ来るぬけ河の紅毛船の長崎へ入津はし  
 折るなりて其歳帰帆の紅毛船より三人の物ぬ  
 志筑某の事候とて長崎紅毛の通事とて  
 住居と強請の事知らるものなり世象圖には  
 今語の語とて二語なりとあり

○金華山之事 并紅海之事

日本の東奥乃海中に金華山といふありは  
 乃砂石を黄令ありといふは砂の種情とて  
 山は是れなるありとて若くして其の事あり

一の舟忽ら災難ありといひつゝよおの紅毛金砂  
 打事いひて思按ふ黄金と鐵とは同氣なり  
 てうねり金氣を多たすは鉄氣も又多く鉄  
 いみ令乃母をれいなり磁石も又鉄乃花實なり  
 あり子の母を離さざるあり常に相貫通を  
 する金花山の海英色なり土金の石字と氣  
 海水へ映しつるあり土金に精氣存たるを  
 磁石乃氣水色を深るるべしとるる小砂の砂石  
 令鐵の氣なる磁多く形よれ入る事ありは  
 其水色乃磁氣も貫通して離る事なかり

一のちり思ふく神の情もあつてはあつて畢  
 竟神といふも陰陽五行石測の妙用あり  
 せば水火木金土と離れて外に神明あり道  
 理も其地の草木土石の皆其地の神物なり  
 ありら磁石のまが利用のさう清地と穢し多  
 盗りとふ事大地の神明と欺る理りあり  
 とやあつて神明に崇めたりといふもあつて  
 神地の土石草木とれよ奪ひつる事君子は人  
 とくも人も思ふに付て地の中は海洋の例の潮  
 水沙石黄色なるれいして黄金多き地ありといふ

魚うらひ都て世果の海崎うはさ海く此奇怪か海  
事多し湖あふ黒色赤色黄色の海あり天竺の  
西紅海とて海潮赤くさゆりあり又日本此  
東海は加利伏爾尼亞とて國あり其國乃海  
皆紅色なり是は東紅海と名づく海を  
珊瑚珠多きゆり其映色なりとて非なり  
是是其地氣乃の色なり潮水乃の色なりわら  
黒色黄色なりとてみる其地氣の色を  
つとく

○紅毛船破損之事

紅毛人といふも大洋海の難風よハ駕船乃妙  
術を叶はさゆりや五十年來れやふ被船漂  
流し又ハ沈没を幸多むいく見聞し寛文六  
丙午の年八月も五時より破損漂流の紅毛  
人八人長崎の津よ送るは又同くハ戊申の  
年對馬より又紅毛人七人長崎へ送るは右ハ  
寛文乃ハ紅毛船朝鮮の地へ漂流して船を  
破損し船人殺十人乃内十人死し多朝鮮  
の地へ在しぐけ内八人長崎へ船人と欲し  
て小舟に盜りて去るは船人漂流を長

崎へおつて彼らふが尸をらは今又七人朝鮮よ  
 在く言上と仍其旨對するへ作方とくらの七人  
 朝鮮より對するとて是長崎へ來り都て十  
 五人皆其年紅毛船の帰帆を乗て歸ぬと  
 是のふあわらに迎るとはるや帰帆の紅毛船更  
 趾乃まへなる萬里長砂とて破損し更趾國ハ  
 舊怨の言慈あつて必とてみまぐ捕へ押送す  
 されどさぬく詭て罪と謝しけむバ國王とさす  
 不便よ抄りへわらるや免して幸ふの途船より  
 久しぬとるや又こくし享保四年也秋七月長崎

へ為らんやして大洋とて難風は漂流し三艘の内一  
 艘は破損して唯三四人を死して廈門といふ所命  
 生くるゆゑあま残る二艘は仍來たつてはといひ  
 廣東國より漂流き共國えし平戸より長崎  
 乃津よりはりて七十九年一也且絶回をたし今  
 年いつるの運やといふきん是あつた世に千代萬  
 世と祈るまで未いつる人とかつたなり唐土船も  
 海乃幸あつた船社の喜蔭は程もぬきをて難い系  
 あるといつたれども是といふといふ老ふたよ若  
 くと千尋の底に沈じると又多うりあつたはふらふ



毎日をわらうとみるはいと老ゆく我亦のさしあはぬ  
ふいとわらうたう 大井川忠波より後士よ事  
乃紅糸にわらうとあせそとつら秋紅毛も唐人  
といふもさるやあつとどや又しつ人の連秋乃あ白  
つとんれば老よと舟のうらまといふよあれゆきの  
あつ波さつぐせはあつとつらつとつと理りたを  
とあつらふよとみゆらぬ

○暹羅金札船之事并暹羅國之沙汰

明曆二年八月暹羅國王の使船一艘長崎乃津よ  
來り別國王の書翰あり是紙金札と号と暹羅

國の横文字されと唐人乃住居をわらわらふ國王  
より命をて書きたるなり外よ本朝への音信  
物たとり其意趣の具は蠻船禁制されの暹  
羅も日本れ難いと案りて日本の通路絶つら紙  
まいて日本後海乃ゆらされを得く高船長崎へ  
けつらんと事紙紙の記つらかり別國東へ海進有  
たれといふいの津ゆらとをさして返翰の長崎刺  
まより命をて紙獻物の受給つとて皆うらされ  
ゆらぬ雜費の料やうとて荷物少く賣をくれ新  
水を送りつて八月帰帆とらるる年を経て日

本の後海ゆりこれつて今も絶として高船長崎  
の津よいつれり船主の住居乃唐人を國王より  
けつとゆへ通達分りたり都て暹羅の南天竺  
乃南夷とて風俗賤とて國土なれと莫卧爾琵琶  
牛の二國み程近く往來船路乃便りよれ而也  
米ハ一俵二三錢常夏の風なれど下は暖りり  
身よ衣もまだ布綿二三尺をもちて身よ厚く  
を禮儀とす一日乃働さるる十日の糧を得る  
されん飢人絶てある事ありとゆへ乞取者あり  
ハるる是五弊不具乃勤とて無病のを令あらし

をみど一家の施しはく三百れ食は得るあり  
熱國乃ちさる風俗甚しやとつてを辭ふ  
欲病とてさゆはれと佛のたふれややとる  
つてハ又佛乃けり絶てて貧歎がらり多  
く朋友相妬とるありは毒瓜りりく害をん幸  
を謀りけぬは同船乃ちもあつ各々のうらみ  
あまば人ごふ一瓦釜を推りへ長く朝夕乃  
命をとりとるは煙多言ふり多うり佛はの  
本國のくわあつたろとていへあやとれは地  
より三百路水の方より琵琶牛といつて國ありと此

周には寺塔伽藍ありて出家者も多く佛はつま  
かぬむの志ありありとつら又みずは長  
崎よ甚く興揚しつらやせん逸民ありつら  
暹羅へ海へ佛在所と拜まんとして友人と二  
人中天竺に到るなり今に祇園精舎と礎石の  
蹟あり石碑も青苔よりあり唯むしとせり  
ろく志ありは祇園精舎乃臨より四日弘道  
道の程は敷瓦一面ありしに今にあり  
多し絶失するを佛の有りぬ萬國の崇教お  
りいやとこれとありぬこの甚く興揚が物あり

或人圖書してわするは一とをの火災は焼去り  
より多くの物得せし人むかひにわすれ  
たれ今一人乃友人いふや死して甚く興揚の長  
崎とて終るはけし暹羅國へ海して琶牛乃伽藍  
あり諸くありしは長崎よ多しつら今に  
ありとありぬ

○暹羅ヨリ千部経志於之事付紅毛印國之沙汰  
慶安の比より暹羅信姑の留人奉り日本の人  
して長崎に着るなり又母は年忌供養として  
弟ありしは許し土産の貨物扱くそりつら

は價と費料ひやくなり。本蓮寺といふところにて僧と  
集めては花經千部誦誦あるべしといひおらば  
小才別志然せうさいべつしぜん乃如く百餘人の僧と法方より清  
して十日の經きやう千部とて供養くやうせしむる長壽ちやうじゆの  
鄙びやくとて對たいふ台たい家けおとさるれば終はつる千部誦と  
つとてとちつとつとつは何始なにはじめめくつとて本蓮寺  
事ことの天てんの二件にけんは乃因縁にんえんふつと地ちちつとて男女  
とつとていあつりまじりけは信善しんぜんの施せ主しゆ姓せいの本谷ほんや民  
としてつとては暹羅國せいらくこくへ送りけは力ちからふ彼地かちに任  
しとてぬの國王こくわう乃家老けらうとぬ暹羅國せいらくこく萬民まんみんの改

はを主しゆとつて巨萬きよばん乃富強ふきやうなりと稱せうせり今いま子孫しよん  
かぬ無む常じやう業ごうとつとてゆゆののほに交趾かうち東とう南なんといふ  
日本にっぽん人にん住居ぢゆうことつとて其その子孫しよん今いまかぬ多た  
くどいおのが怒いかでかつと捨すてる地ち乃境のきやうに住居ぢゆうこしつ  
ふといふとつとていふ事ことのおれがとつとて  
いふとつとて母はは乃乃ののの母ははいふとつとてをた夷あやのあや  
しあはれむとつとていふとつとて田舎いんかなよ京きやうあり  
をの事こともいふとつとていふとつとて田舎いんかなよ京きやうあり  
京きやうに田舎いんかあり中華ちゆうかに夷あや秋あきあり夷あや秋あきに中華ちゆうか  
ありゆもの本國ほんこくへ蠻夷ばんあやの中ちゆうに蠻夷ばんあやとつとて國

長崎通話二

は嚴密なる過多刑罰不仁のありしは故なりと  
いへども其國はよくよく事なく七人の國主お  
のく相争ひしりて相奪するをく用基よると今  
ゆく一千八百餘年率はお亂ましく事かしく  
今日幸にあら高松の國を七人會同の旨賣  
して利かひせしよ配分して高下をく僅と相  
争ふ事かしくとや唐土戰國乃七雄と紅毛  
乃をよ取ざるとやいつり乃はくや或人紅毛人よ日  
本軍戰の繪草子孤兒とて武勇のありしは  
かど紅毛乃詞してくう國をけりよはくくと

國も此國戰の日本を何もの國の軍よとよ  
つや日本と日本と相殺ふからとといひ紅毛いつり  
抑りよく不ををあらはれはくといふねさかる國は  
軍戰といふものかしくやといひ紅毛吾國あを  
軍戰ありといふも終は國のひとと相闘い  
事をと不聞みな異域他邦乃人とお殺すとい  
吾國もも又多うといひくともや七人の國を初同  
して相奪ふ事か死に傷りふあはくごとく一夷中  
め、京わりのなはく事か死にふたし

長崎宿話二終

長崎宿話

